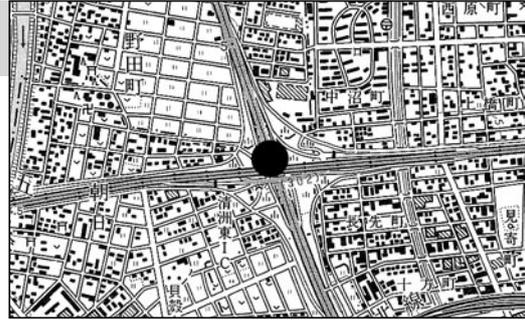


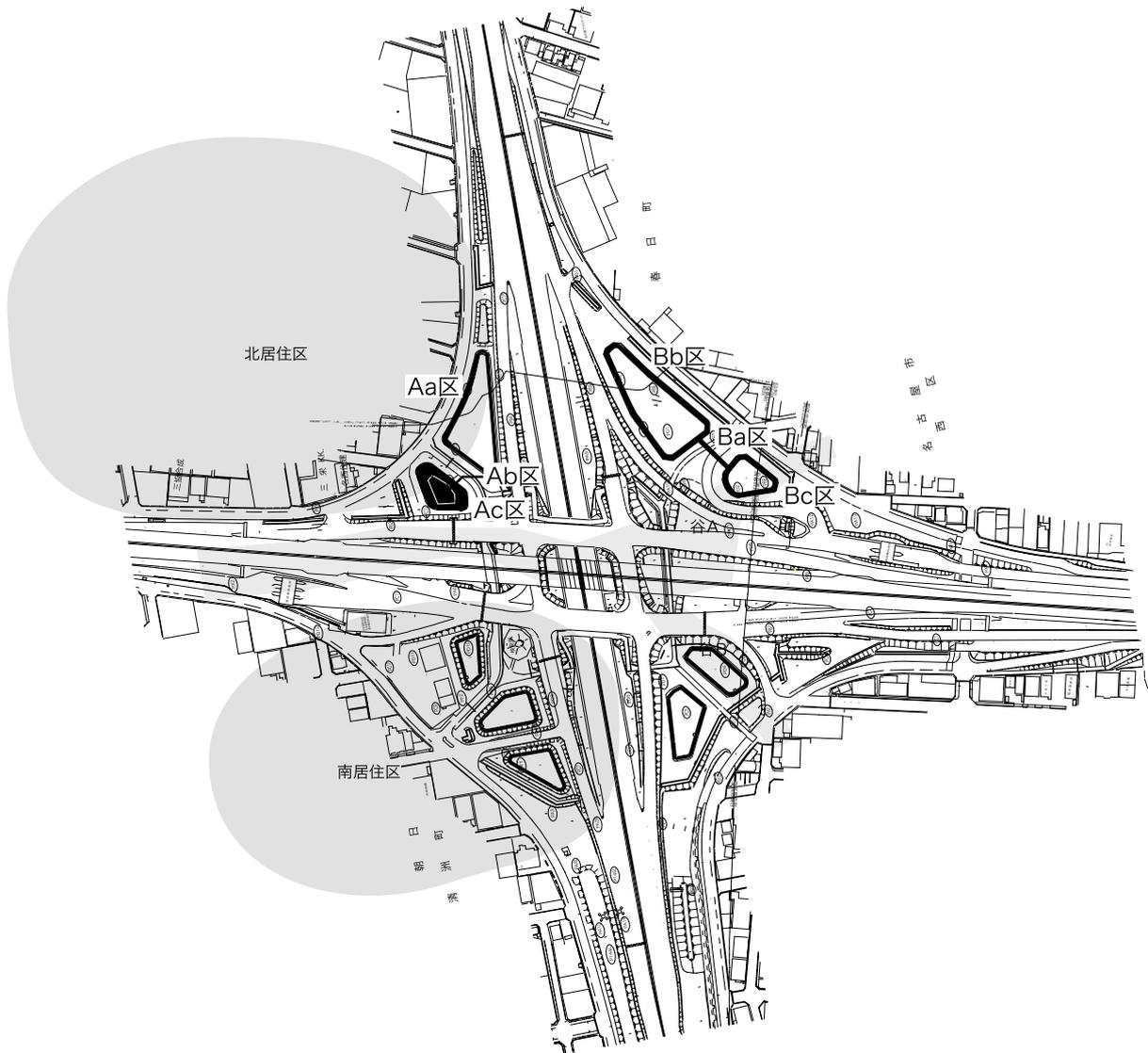
あさひ
朝日遺跡

所在地 西春日井郡清洲町、春日町、名古屋市西区
(北緯35度13分18秒 東経136度51分18秒)
調査理由 名岐道路
調査期間 平成16年10月～平成17年3月
調査面積 2,616㎡
担当者 石黒立人・加藤博紀・川添和暁・早野浩二



調査地点(1/2.5万「清洲」)

調査の経過 本遺跡は、西春日井郡清洲町を中心に同春日町・新川町・名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落である。平成10年度より清洲JCT建設に伴い、当埋蔵文化財センターによる発掘調査が継続されている。調査は、名岐道路建設に伴う事前調査として、国土交通省愛知県道事務所・日本道路公団中部支社・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は、2,616㎡を対象に、04Aa区・04Ab区・04Ac区・04Ba区・04Bb区・04Bc区の6調査区を設定し、調査を行った。



平成16年度調査区位置図

調査の概要
04Aa区

調査区は平成11年度に調査された99Ac区を挟み、また愛知県教育委員会が昭和54年度に調査した第78区～第82区の西側に位置する。検出された遺構は、大きく弥生中期前葉・弥生後期前半・古墳時代初頭・中世の4時期に分けられる。

弥生中期前葉の遺構としては、竪穴住居跡10軒程度・土坑多数・貝層・炉跡などがある。竪穴住居には方形プランと円形プランの両者がある。調査区北側を中心に、土坑内における貝層の堆積とともに、一部が遺構外に斜面堆積している様子が確認された。またそれに伴う焼土・炭化物を伴う炉跡が2基(SF01・SF02)と平坦面を作り出すための整地部分が検出された。SF01は径約3mの円形で、SF02に比べより広範囲に広がっているばかりか、その縁辺で貝層と焼土は互層をなし、貝層堆積と焼土形成が連続して行われていたようである。一方、整地層は貝層下および貝層中にも確認できたことから、貝層・焼土の形成直前および形成中に、整地作業が行われたようである。貝層の貝種はマガキが主体であり、ハマグリ・ヤマトシジミが若干含まれる。

弥生後期前半の遺構としては、竪穴住居跡12軒・環濠1条・区画溝1条がある。環濠は内環濠と考えられ、検出時で幅約1m70cm・深さ約1m50cmを測り、断面形状は逆台形である。区画溝は内環濠に直交するもので、検出時で幅約2m50cm・深さ約1m80cmを測り、これも断面形状は逆台形である。両者とも昭和54年度の調査でも確認されているものである。竪穴住居跡は、調査区全面で検出された。方形住居のみであり、長軸は北西—南東方向が中心である。構築材などの炭化物が多量に出土する住居跡(焼失家屋)もいくつか見つかっている。また、99Ac区に南接するSB01やその付近からは、ガラス小玉および管玉がまとめて出土している。

古墳時代初頭の遺構としては、竪穴住居跡3軒がある。調査区の南端・中央・北端に見られ、調査区周辺での居住地形成がこの時期に終焉したようである。いずれも方形プランであり、長軸は北西—南東方向が中心である。SB02では、住居内から土器群がまとめて出土した。

中世の遺構では、方形土坑が3基見つかっている。(川添和暁)



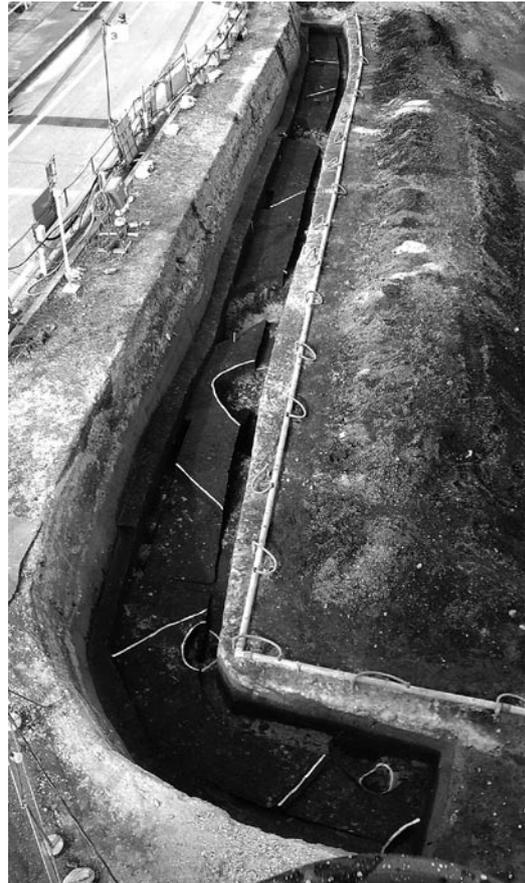
SF01および貝層検出状況(南西より)



SF01および貝層セクション(東より)



弥生時代後期～古墳時代初頭遺構全景(南より)



弥生時代後期前半遺構全景(南より)



弥生時代中期前葉遺構全景(南より)



SB01遺物検出状況(南より)



SK93(東より)

04Ab・Ac区 04Ab・Ac区は、北居住区と谷Aの北岸が接する位置に相当する。調整池の底面となる04Ab区については、愛知県教育委員会との協議により、調査の対象を弥生時代後期の遺構が展開する調査区北半に限定し、調査区南半の弥生時代中期以前の遺構と堆積層は保存した。調査した主な遺構は、弥生時代後期の環濠3条、弥生時代中期後葉の大型土坑と貝層、弥生時代中期前葉の環濠1条、弥生時代の河道(谷A)、中世の方形土坑である。

弥生時代後期の遺構として、北居住区を囲繞する環濠3条を検出した。環濠の幅は2.5m前後、深さは1.5～2.0mである。内環濠SD01と外環濠SD02は後期前葉に開削され、埋没後、後期中葉にSD01を外環濠として再掘削すると同時に、内環濠SD03が新たに掘削される。つまり環濠は、2条が同時期に併存して機能したことになる。2条の環濠は、当初は断面逆台形、再掘削時には断面V字形に掘削され、掘削土は環濠間の盛土としている。また、環濠は遅くとも古墳時代初頭までにその機能を停止していることも確認した。

特筆すべきは、外環濠SD02が陸橋部を形成し、北居住区が南東に向けて開放することが判明したことである。加えてSD02が外方に向けて弧状に張り出すことは、半島状に突出する区画(別区?)を設定する意識があったことをも連想させる。

SD02には、木製品と土器を主とする遺物が大量に廃棄されていた。出土した木製品には彩色楯、工具(鑿?)の柄、武器形、合子蓋、高杯、筒形容器、丸木舟などがある。工具の柄は彩色がある優品である。なお、後期の環濠に貝の廃棄は認められなかった。

弥生時代中期後葉の大型土坑SK03は、谷A北岸近くにおいて検出した。径約4.5mの円形で、擂鉢状に掘削される。SK03にはハマグリ、アカニシを主体とする貝と石斧柄、鋤・鍬などの木製品が大量に廃棄されていた。中期後葉の貝層は同じくハマグリ、アカニシを主体とし、北居住区の縁辺から谷Aにかけて広範囲に形成される。

弥生時代中期前葉の環濠SD10は、SD01南岸に一部重複しながら、谷A北岸に沿って掘削される。04Ab区で検出した部分については遺構を保存したため、04Ac区においてその一部分を調査したにすぎない。

中世の方形土坑は谷A近辺に集中する傾向が認められた。

04Ab・Ac区の調査においては、弥生時代後期の環濠の開削と再掘削の時期を明確にしたこと、環濠開口部付近の景観復原に関係する資料を得たことが特筆すべき成果である。これらは後期の環濠集落の機能的な問題にも直結する重要な知見である。また、環濠から一括出土した土器群や木製品群は器種も豊富で、単一時期の遺物組成を示す良好な資料体としての評価が与えられる。



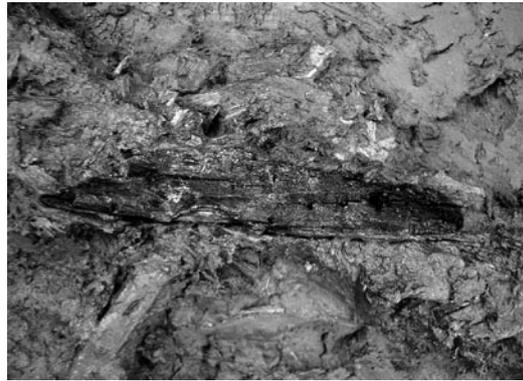
04Ab区全景 (弥生時代後期)



SD01高杯



SD02



SD02彩色楯



SD02パレススタイル壺



SD03



SK03断面



04Ac区

04Ba・Bb区 04Ba・Bb区は、北居住区の東外縁に相当する。検出した主な遺構は、弥生時代中期前葉の竪穴住居と土坑、中期中葉～中期後葉の方形周溝墓、後期の竪穴住居、中世の水田と方形土坑である。

弥生時代中期前葉の遺構は、04Bb区北東部分を中心に分布し、より東の地区には安定した居住域が続くことも想定できた。検出した遺構は竪穴住居と大型の廃棄土坑などである。竪穴住居は床の構築が複数回に及ぶものが多く確認され、遺物も濃密に出土した。廃棄土坑は長軸2.0m以上、短軸約1.5m、深さ約1.5mで、平面形は長楕円形状と推定される。土坑には種子などの自然遺物も遺存する。また、04Bb区南西では、谷に面した緩傾斜面に遺物が大量に廃棄されていた。

弥生時代中期中葉～中期後葉の方形周溝墓は調査区全域に分布する。中期後葉の方形周溝墓については、17基を確認した。これらは04Bb区北西、北居住区の環濠帯に接する地点から順次築造され、04Bb区の南東方向に徐々に造墓範囲を拡大したことも明らかとなった。墳丘盛土の残存は良好で、盛土内に埋設された土器棺を6基確認した。周溝は基盤層を深く掘削し、掘削土は墳丘盛土としている。周溝の幅は3.0m前後で、周溝底面からの墳丘の高さは約2.0mに達する。周溝内各所からは供献土器が出土した。他に特筆すべき遺物として、04Bb区北西端の方形周溝墓の上層より出土した腕輪形(貝輪形)土製品がある。



04Ba区方形周溝墓



04Bb区方形周溝墓



04Bb区土器棺



04Bb区SB12

中期中葉の方形周溝墓は、中期後葉の方形周溝墓との重複によって、全体像を把握することが困難であった。概して小規模で、供献土器がともなうことはまれである。

弥生時代後期には方形周溝墓の埋没が進行し、04Ba区、Bb区南東は散在的な居住地へと移行する。居住地は埋没過程の方形周溝墓の起伏を利用して住居や配水路を配置し、周溝にはしばしば土器を廃棄する。竪穴住居SB12では土器の一括出土、柱根の遺存を確認した。

中世の水田は重複関係から、方形土坑に先行することが明らかとなった。なお、04Bb区北西の北居住区から続く微高地端部、04Bb区南西の谷に面した南西方向への緩傾斜面を中心に、縄文時代後期の土器の分布が確認された。

04Ba・Bb区の調査においては、広域に展開する方形周溝墓群を良好な状態で調査できたことが特筆される。加えて、縄文時代から近世に及ぶ景観、土地利用の変遷を詳細に跡づける新知見が数多く得られた意義も大きい。これらの情報によって、従来不明瞭であった東居住区と東墓域の構造の理解が大きく前進するものと思われる。(早野浩二)

